

指定討論(1)

堀 信行

(東京都立大学名誉教授)

聞き終わった直後で纏まらないが、以下のことを考えた。私は高校時代に伊勢湾台風に出遭い、死ぬような瞬間を体験し、台風に恐怖心を抱いたまま今に至っている。その後広島大学へ行き、原爆の問題に出会った。2回転居した間借り先の両家族とも原爆に会われ、一方の方はご主人と息子さんだけが生き残り、二人とも後遺症に苦しんでおられた。石井秀樹先生の発表で、福島の放射能汚染の実態を聞いたが、70年以上前の広島の問題も現在進行形。放射能汚染の深刻さは、内容によっては万年スケールである。

広島に続いて、私は沖縄研究で1771年に石垣島をはじめ先島諸島を襲った明和の大津波を知った。津波の痕跡は今も追跡できるが、人間の記憶から消え去るのは早い。しかし、現地の牧野清氏が詳細な調査結果を『八重山の明和の大津波』として1968年に刊行し、津波研究に大きな刺激を与えた。私は沖縄のウミンチュ（漁民）に何回か聞いてみた。「ウミンチュは海の幸で生きている。その海が牙をむき津波がウミンチュを襲った。それをどう受け止めていますか」と。ウミンチュの返事はいつも同じだった。「われわれの拝みが足りないからだ」と。なすすべがない気持ちを自分の問題とし、海を恨まない気持ちの深さを知った。また、私はアフリカ研究で砂漠化・干ばつ・飢餓に直結する荒廃景観の研究も行った。例えばニジェールのザルマの人々は「飢餓」を「バンダ・バレイ」という。この意味は、(口にする食物が見えないように)「背を向ける」だった。地域ごとに固有の災害があり、それぞれの災害を文化の域にまで深めていることを学んだ。

災害の多くは、目に見える場合が一般的であるが、災害を広く捉えれば、個人の人生の中で起きる事件と向き合い、目に見えにくい災害もある。阿部重樹先生がまとめとして、「災害は私たちに別の社会を見せてくれる」という趣旨の話がされた。そ

して風化と忘却という文脈から出てきた言葉に「災害ユートピア」があった。熊坂義裕先生の発表では、血の通った社会に居場所を見つけられるまで寄り添うことの大切さ・重要さ・大変さの話があった。自省を込めて思うのは、言葉で云うのは簡単だ。「人生を賭けて寄り添う」とはとても重く大切な言葉だと改めて考えさせられた。

災害に出遭った人々同士が、ユートピアのような状態になれるのに、何故その後の社会にそれが生されないのか。考えてみれば、災害に遭遇し、地位や貧富といった社会的関係の無い状態であればこそ、人間は裸になれる。それがユートピアを生み出すと考えると、災害が表向き終わり、個人が再び社会的衣を着始めた時、個人差が露出し、ユートピア的な精神状態が消え去る。そう思った時、私は仏教の「涅槃」を想起した。涅槃とは、サンスクリット語のニルヴァーナの音写である。ニルヴァーナとは、「風が炎を吹き消す」という意味で、宗教的には煩悩や生命が吹き消され、何もない悟りの状態のことである。涅槃とは美しい世界が想像されるが、涅槃の「涅」は水底の黒い泥の意、「槃」はたらいのような平たい容器の意である。器としての泥沼の中からハスの花が咲く風景とニルヴァーナの本質と重ねた訳者の心に思いを寄せつつ、災害の本質的な世界に涅槃があるとも思った。

そう考えると阿部先生の文学の中の災害ユートピアとは、自分をリセットし、同感・共感・共存を通して人間の原点に立ち返り、人間の本質を見ること。「災害を通して、私達はもう一度生き直すことを学ぶのだ」と。では、災害のない日常の中で人間は何を考えたか。それは儀礼だと私は思う。儀礼においては、カミ(=自然)の下で人間の優劣や貧富は問題でなく、人間として同じ存在となる。発表を聞きながら、先人たちが生き残した文化の原点に立ち返ることの大切さを再認識した。